

さちひろ

発行：天理教狭千廣分教会 〒589-0021 大阪狭山市今熊1-1133 Tel.072-365-2571

E-mail:wat@sachihiro.com url:http://sachihiro.com 編集兼発行人・山口 渡

天理教狭千廣分教会の広報紙

- 1面・みんなの教理入門(1)
- 2面・幸せを届ける言葉
- 3面・新連載・おさしづの点滴
- 4面・教会の動き・編集後記

教会の動き

- 朝づとめ：毎朝・6時30分
 - 夕づとめ：毎夕・7時00分
 - 春季大祭：1月21日午後1時30分
 - 秋季大祭：10月21日午後1時30分
 - 月次祭：毎月21日 午後1時30分
 - 春・秋季霊祭：3月22日・9月22日 午後1時30分
- ※教会の場所は、左の地図の🌀マーク。市立公民館の裏・西側です。



■元旦祭執行

大晦日、NHKの紅白歌合戦が終了して、「行く年来る年」が終わる頃に狭千廣分教会でも、元旦祭がつとめられました。祭文奏上の後、座りづとめに続いて「よろづよ」から十二下りをつとめて、今年一年の世の平和と人々の健康を親神様に祈念しました。

■本部・お節会開催

年末に、テレビをみていたら、天理教会本部の鏡餅が神殿にお供えされるところの映像がニュースで流れていました。

そのお餅が四日に「鏡開き」と銘打って、切り整えられて、五日から七日までの三日間に、帰参者に無料にふるまわれるお節会（せち）が開催されます。当教会でも六日に、おぢばに帰ってこのお節会に参加します。

■天理時報の手配り

昨年十一月より、当・阪南支部でも、天理時報の手配りが始まっています。新年は11日から配布開始となります。当支部では、大きな問題もなく、順調に動き出しています。

《編集後記》

▼あけまして、おめでとうございます。本年も何卒よろしくお願い申し上げます。

▼年改まって、巻頭、そして第三面の連載記事を改めました。

▼巻頭の記事は、芹澤茂・天理大学名誉教授の「みんなの教理入門」です。

▼第三面は、これまで『稿本天理教祖伝逸話篇』の一篇を解説していましたが、これを改め、わたしがかつて「天理時報」に寄稿していた「おやのことは」をここに加筆して、順次掲載することといたしました。

▼ホームページのブログには、毎度勝手気ままな話を載せております。そちらもご覧ください。 <http://sachihiro.com> #やまさんのブログ から入れます。

さちひろ 第22号

編集兼発行人・山口 渡
平成20年1月5日
大阪狭山市今熊1丁目1133番地
Tel.072136512571



新年明けましておめでとうございます。新しい年を迎えて、改めて天理教の教理入門をこの巻頭に連載します。本編は、昭和59年に天理教の週刊新聞である「天理時報」に1年間にわたって連載された芹澤先生の玉稿ですが、残念ながら未だ本にはなっておりません。そこで、ここに順次掲載することにいたします。

「みんなの教理入門」連載・1 ぢば・おやさま

天理大学名誉教授・芹澤 茂

一ツ 正月こゑのきづけは やれめづらしい
二二にっこりさづけもたら やれたのもしや
正月におぢばは帰りをして、「肥の授け」という授けものを頂く。

肥の授けは一つの例で、お屋敷に帰って、おやさまより様々な授けもの、親神の恵み・利益（りやく）・守護（しゅご）を頂くのである。

おぢばの元旦祭には、日本各地の神社仏閣から出されるような縁起物を出されてはいないが、かんろだいに参拝し、教祖殿で存命のおやさまにごあいさつに出れば、いつでも、どんな人でもみな授けものを頂けるのである。（眼に見えないけれど、信仰によってこれを知ることができる）

かんろだいの据えられている場所はぢばと呼ばれる。ぢばとは場所とか産地という意味の言葉で、元なるぢば、すなわち、元初まり（元始）において人間と人間世界が創造され、初め掛けられた場所ということである。

このぢばのある屋敷が、元のやしきであり、お屋敷と呼ばれるところである。お屋敷とは、また、おやさまの住まわれる屋敷でもある。

おやさまは、天保九年四十二歳のとき、このお屋敷

おぢばの正月は元日祭に始まる。数日間の準備も万端ととのい夜明けを迎えて新しい年の息吹は、人にも自然にもみなぎってくる。神殿の中央に据ったかんろだいを囲み、かぐらづとめがつとめられる。東の空がしらんで、礼拝場の屋根が闇（やみ）から姿を次第に現し、やがてお屋敷の建物もその輪郭が鮮明になるころ、おつとめの太鼓の音は一段と高く鳴る。かぐらづとめのため、おつとめの太鼓の音は一段と高く鳴る。かぐらづとめられる。参拝の人の姿もにわかにはっきりして来て、その数を増すようにみえる。おつとめに参拝する人々の唱和するみかぐらうたの声も、澄み切った空気にひびき、人の心の奥深くしみ透る。みかぐらうたの十二下りは、次のお言葉に始まる。

に住んでおられたので、親神は、やしき（お屋敷）のいんぬん（元初まり）において親神が人間と人間世界を初め掛けた場所であること」と、おやさま魂のいんぬん（元初まり）において人間の母親としての役目をなされたことを見澄まして、おやさまをやしる（社）として天からこの世に天降（あまくだ）つて来られたのである。

おやさまは、それ以来五十年の間、苦勞艱難（かんなん）の中を明るく勇んで通られ、親神の初められたお道（この世治める真実の道）と言われた。六号四）を付けて来られた。九十歳のとき、明治二十年正月二十六日（二月十八日）に御身をお隠しになつたが、魂は元のやしき（お屋敷）に止まって、生前同様の守護をされている。教祖殿はその住居である。

お屋敷はまた親里（親のいる故郷）であり、人々が里帰りする。

正月には、節会（おせち）というが五日より始まり、六七、八（編者註・現在は五日から七日まで）の三日間一般の参賀がにぎやかに行われ、参拝者はお雑煮の餅に身も心も満足する。

お屋敷にはちがばがありおやさまがお居になるということ、この「ちがば・教祖（おやさま）の理（真理、教）」は、お道（天理教）の信仰の中心となるものである。

それと共に、お道のたすけ（救済）の根源である。

みかぐらうた十二下りは、一下り目に続いて、次のお言葉が始まる。（二下り目）

とんく／＼とんと正月をどりはじめ八やれおもしろい
二ツ ふしぎなふしんかゝれば
やれにぎはしや

ここでつとめをつとめられるのは、ふしぎなふしん、せかいのふしん（世界だすけ）の初まりであり、合図である。

国々所々、各地にある教会はもとより、親神を祀つてある所には親神が出張つておられる。そこでもまた、お屋敷のように、人々が参拝して親神の恵み、利益、守護を頂けるのである。

このように、親神の世界だすけは、ちがば・おやさまに発して教会を貫き、人々の中に広げられていく。

幸せを届ける言葉

高橋美津志「ちよつとひとこと」

（善本社刊）から

魂

カボチャを収穫しながら、フト思った。痩せた畑からは痩せた農作物しかできない。

常に心を配り、身体を動かして、肥料を丹念に施さないと、土は肥えない。越えた畑に農作物は豊かに育つ。

人間も同じだ。魂が痩せていると、何をしても思うようにならず失敗する。自分さえよければそれでよいという、自分勝手な心遣いに、魂が痩せ、常にはたはたの人を、

喜ばせ樂にする心配りの働きに、魂が豊かにふとる。

肥えた魂に、よい考えや行いが育ち幸福を作る。

おさしづの点滴 ①

これより「おさしづの点滴」と題して、かつて天理時報に「おやのことば」という題で、平成15年1月より17年12月まで連載しました拙稿をもとに一部変更して掲載いたします。

疑うて暮らし居るがよ
く思案せよ。さあ神が
言う事嘘なら、四十九
年前より今までこの道
続きはせまい。今まで
に言うた事見えてある。
これで思やんせよ。

（20・1・4）

この道を見て思案せよ

【解説】

揺らぎのない信仰を確立することは、わたしたちだれも目指すところですが、多くは、そこに一気に跳躍してたどりつけるわけではありません。思い通りにことが運んでいるときは、神様を疑うこともありません、神様の存在そのものも忘れられていくかも知れませんが、都合な事態に遭遇した時、不自由な暮らしを余儀なくされた時、信仰にゆらぎが生じ、疑い心も出てくるものです。

そうした日々のなかに、聞かしていただく神様の話をよりどころにして、立教以来脈々と続いている「この道」を見れば、また神様が話の通りに働かれている姿（証拠）に接すれば、自ずからこの道信じることができま。そしてだんだんとその循環を反復しながら、昨日より今日、きょうより明日と、少しずつでも上向きの思案ができるように成長させていただけのがこの道の信仰であると思えます。

このおさしづは、日々の暮らしの、そうした循環のなかで「この道」（実証の道／神の話／証拠）を見て「よく思案せよ」「思やんせよ」と言われています。

にち／＼にすむしわかりしむねのうち
せゑちんしたいみへてくるぞや
六号15

立教のときの問答に、
「誰が来ても神は退かぬ。今は種々と心配するは無理でないけれど、二十年三十年経つたなれば、皆の者成程と思う日が来る程に。」

またさらに、別のおさしづには、
「四十九年以前
より誠という
思案があろう、
実という処が あ
らう。」

（20・1・13）
と仰せになって
おられます。

